

〈虚〉の文学から〈実〉の文学への凝視

——二葉亭四迷の文学論における「真理論」の成立の背景——

鄭 炳 浩

一 はじめに

明治二〇年に迫ろうとする時代、二葉亭が当時としてはほとんど不毛の領域に近かった文学理論の構築に踏み出した背景には、周知のごとく坪内逍遙との出会いと彼の積極的な推薦があった。その事情はともかくも、『小説神髓』と『小説総論』が代表するように、この二人の近代小説に対する理論の構築は、その背景ないしは基盤となるイギリス文学とロシア文学といった差異は歴然と認められるものの、日本における文学意識を前近代の遊戯的な芸観から離脱させ、欧米の文学概念に近づかせることで、文学の近代化に新たな幕を開いたといえよう。

これまでの二葉亭の文学理論に関する先行論のほとんどは作家の〈伝記的な事実〉に基づいたり、〈ロシア文学の影響〉の跡を追究したりするというのがその研究の大きな流れであった。本論文に惹きつけて前者の例を挙げれば、畑有三は、二葉亭四迷という「文学者の成立」に彼の文学理論のキーワードである「『真理』探求志向」といった意識が潜められていたと指摘し、「その『真理』探求志向の根底」には、「当時の「下級士族

出身の不動性」が働いていたため、「絶対的一定不変」の「真理」を追い求めて「現実の統一把握欲求」があったと捉えている。とりわけ二葉亭の「真理」が「漢学」（朱子学）の「『真の理』」というところから生まれた熟語¹⁾という指摘は本論文にとつて注意される。それに対して、後者の場合は二葉亭の文学理論の母胎を論じるというもので、すでに昭和七年、岩城準太郎が「二葉亭の新しいさは、露西亜語を学び露西亜文学を読んだ事に胚胎し²⁾」ていると言及して以来、そのことは誰もが認める事実である。

ところが、このような研究とは対照的に、二葉亭と同時代の文化思潮を関連づけてその文学理論を考察するといった視座と方法は皆無に近いと言っても過言でないであろう。その視座と方法というのは、当時啓蒙思想を始め、多様なジャンルの学問が開花する時代的動向の中に二葉亭の文学論を据えて、その模写論を捉えようとする試みである。むしろ、二葉亭の文学論も当時の逍遙を中心とする〈小説改良〉という側面からは当然ふれられているのであって、当時の文化思潮的なコンテクストがまったく考慮されていないとは断じ得ないかもしれない。しか

し、このような視座からする論考でも関心の中心に置かれてい
る方向性は、彼の文学論が江戸時代以来の「戯作文学」から
「近代小説」へと転換する一つの契機をなしているという固定
した範疇にとどまっている場合がほとんどである。

そこで本論は、二葉亭における「模写理論」の成立という問
題を、単に作者内部の問題として、あるいはロシア文学の影響
の問題としてばかりでなく、当時の文化思潮というコンテクス
トから考察することにする。それによって、明治十年代という
〈文学環境〉の中で、二葉亭が目指していた〈作者主体〉の論
理を再考するところに本論の目的がある。とりわけ、その文学
論の核心をなしている模写対象としての〈真理〉の成立とそ
のような〈真理論〉を成り立たせている同時代の文化的背景に焦
点を当てることで、二葉亭の文学論が孕んでいる〈作者主体の
意図〉を考察しようとする。

二 模写対象として「真理」の成立

― 文芸用語としての「真理論」 ―

坪内逍遙は、明治二〇年一月二日付の『読売新聞』で「美
術ハ（中略）真理人情を写す者なりとハ斯申す隠居と我友冷々
亭主人（二葉亭―引用者注）の外に何時ごろ誰人が唱へたる
ぞ」と述べている。この言説は明らかに、「真理」を「文学の
中心に据えたのは自分と四迷が嚆矢であるという誇りの強」さ
を示すと同時に、「真理」という概念そのものがすでに文芸用
語となっていたことをうかがわせている。ところが、この「真
理」という言葉を初めて文芸用語として用いたのは、「美術は

真理の直接の観察、若くは形像中の意匠なり」で始まる「美術
の本義」（原題はベリーンスキの「芸術のイデア」1841）に
おける二葉亭の訳文であった。

だとすれば、この二葉亭によって文芸用語として成立された
というべく、「真理」という概念は彼の文学論でどのような位
置を占めていたのか。そして、それに即して新たな文学の理論
を構築しようとした時、それが含意するところはどこにあった
のか。

まず、「真理」の概念は「落葉のはきよせ 二籠め」におけ
る「リアリチー本義」と題するところで、「リアリチイとは現
象に形はれたる真理をいふ也」と規定されている。その規定か
らすると、「真理」とは対象描写の際、対象（現象）にひそ
むリアリティを指していることになる。それゆえに、「現象」
とはそのリアリティに入り込むための素材ということになる。
とすれば、この概念は「小説総論」における「意（アイデア）」
／「形（フォーム）」の関係、もしくは「模写といへることは
実相を仮りて虚相を写し出すといふことなり」という「模写」
の定義に示されている。〈実相〉／〈虚相〉の関係と等しいも
のである。このような関係からもわかるように、二葉亭の文学
論、とりわけその文学論の根幹となっている模写論はつねに、
対の概念をなしていたものであった。

この二葉亭の対の概念は彼の文学論においては「意」「虚相」
「真理」の概念系と「形」「実相」「現象」の概念系の対構造と
して捉えられるものである。前者の概念系は、例えば、「形（フ
ォーム）」という概念について、「形とは物なり。物動いて事を

生ず。されば事も亦形なり」(『小説総論』) という指摘が示しているように、この世界の外面的な「物事」を指している。したがってこの概念系の意味範囲には、坪内逍遙の文学理論に見られる心理的現象としての「人情」と人間行為の外面的現象としての「世態風俗」の対構造をふくみ込んでしまふことになる。次に、この概念系と対をなしているもう一方の概念系「意」「虚相」「真理」の内容を明らかにする必要があるが、そのためには、「小説総論」の執筆に際して深く影響されたベリンスキーの小説理論の考察に向かわねばならない。

この概念系に属する「意」という用語が「小説総論」の言説では「アイデア」という言葉で敷衍されていることがまず注意される。そこで「小説総論」の執筆だが、それが「ベリンスキーの芸術論の大意めいたものを」「通俗に、自分の物にして砕いて書いてくれ⁵⁾」という逍遙の依嘱に二葉亭が応じたという事実からわかるように、「小説総論」および「真理論」はベリンスキーの影響を強く受けている。その影響関係からいって、この概念系は、後で詳しく考察するが、「美術の本義」における「意匠の由て生ずる所のは真理なり(中略)自ら真理を生ずるとは真理の独生(その固有の時間を経過して発達すること)するを云ふ」といった「真理」の概念に由来していることが確認できる。

この二葉亭が翻訳した当該個所の現代訳をみると「思惟の出発点、起点は、神の絶対的理念(アイデア―引用者注)である(中略)理念の自分自身からの展開とは、理念がその本来の諸契機を通過することである⁶⁾」いうようになっていいる。したがっ

て、この概念系の原義は、世界の存在の根源を意味する「思惟の出発点、起点」である「神の絶対的アイデア」に由来している。二葉亭が「真理」と訳した、「神の絶対的アイデア」は、前の引用文がうかがわせているように、「時間とともに必然的に発展するアイデア⁷⁾」、すなわち運動・変化・発展の属性を持つ「アイデア」であった。しかしベリンスキーから深い影響を受けた「小説総論」では、運動・変化・発展する「アイデア」であるはずの「意」は、「万古不変の必然的なもの」として、ただ「宇宙間の森羅万象の中にある」(『小説総論』) 絶対的・一定不変の實在という概念に変換されていたのである。

この問題はこれまで多くの先行論で取り上げられたことだが、その中でも次の二つがつねに論点とされた。まず一つは、「神の絶対的アイデア」を「真理」に訳したところには、「神を信ずることもできず⁸⁾」、アイデアが、「神的」アイデアであるという点は、どうやら、意識的に拒んだ⁹⁾。ためだという見方である。しかし、「小説総論」が書かれる一ヶ月前の明治一九年三月七日に二葉亭が逍遙に「美術の目的は真理を發揮するにあり、神の製作には不美なるものなし」と述べているところを考慮すると、二葉亭が故意に「神」という概念を欠落したという見解はそれほど説得力がないといえる。そればかりでなく、『美術の本義』では「其中には諸生存物の衆母なる神意のみあつて主義す。神意は蓋し万有を生ぜし」という個所に見える「神意」は実は、「肉体なき諸理念(アイデア)」を誤訳しているのであって、その点からみても「神」ということは意識的に避けた¹⁰⁾とは断じえない。とすれば、その「神の絶対的アイデア」を「真理」

と訳したのは、むしろ二葉亭なりの戦略が潜んでいる意識的な誤訳だったといえよう。

次にもう一つの論点として取り上げられているのは、ペリーンスキーの「イデア」が「歴史的発展過程を長々とたどる」ことであつたにもかかわらず、二葉亭の「意」¹¹では、「時間とともに『前進し発展する』ことのない」「情態的」な実在と変換されているという問題である。この問題を考察した先行論では、主に朱子学や詩論、俳論における虚実論の伝統を受け継ぐ概念と位置づけている。例えば、畑有三は、「ペリーンスキーを越えて独自の絶対的一定不変という考え方にまで敷衍されていること」¹²は、当時の「下級士族出身の不動性」が働いていたため、「絶対的一定不変」の「真理」を追い求めて「現実の統一把握欲求」があつたと認識している。それゆえに、二葉亭の「真理」とは「漢学」（朱子学）の「『真の理』」というところから生まれた熟語」と定位している。一方、十川信介も、「時間とともにおのずから発展する『神の絶対的イデア』」という概念を切り離れた二葉亭の「意」は、その「論理的曖昧さをおおいかくすため」、「虚相」「実相」という用語に置換されているように、結局は「虚実論」にたどり着いたと断定している。¹²

ところで、この論のどちらに從うにしても、このロシア文学からの文学理論の受容の根底には前近代的なパラダイムが働いていた痕跡を見出すことができよう。ここには明治初期、いまだに漢学教育を受けていた知識人の一面が読みとれる。

しかし、この問題を追究するに際して、もっと注意深く考慮しなければならぬことは、当時における「真理」という用語

の一般的な流通である。すなわち、二葉亭の「真理論」における「イデア」の概念がこのように「一定不変」のものとして固着してしまった背景には、次の言説群が示しているように、当時流通されていた啓蒙思想を始めとする学問・科学における「真理」の概念を念頭に置いていたからだといえよう。

① 学術は真理なり（中略）学術上の真理といへば、一定不変の物を指す¹³

② 「学術の真理は二二が四の如く」*only truth*なる真理無二と云ふことを知らざるべからず「其真理たる古今更に変ることなきものなり」¹⁴

③ 抑も一定の真理は万古不変の者なり故に世運は寧ろ真理に從つて変遷すべしと雖も真理は決して時勢に伴つて変遷すべきものにあらず¹⁵

二葉亭における芸術描写の対象である「イデア」（意）は、「小説総論」で引用されている「二二が四」という学問上の知識の根源（真理）と同一に措定していたため、その「イデア」が当時の文化思潮の環境においては「一定不変の真理」と認識されたのは当然の結果だといえる。だから、「小説総論」の「イデア」、もしくは「美術の本義」における「真理」の形成には、当時の一定不変な性質を持つ「実用学問」上の「真理」という概念の影響があつた。というよりも言論界の享受層にとつてそのような概念として理解されている以上、その概念への適応を意識的に考慮したといふべきかもしれない。

つまり、二葉亭における文芸用語として「真理論」を位置づけ、模写対象としての「真理」の認識に傍点を置いた背景には、このような同時代的時代思潮を背負っていたからだといえる。このことをよく示す言説が次のような文章である。

その書は如何なる類ひかといへば粹とか通とかいひて此世をあそびくらせし人々の食はうかため、呼吸をしやうかために書散らしたる有りても益なく無し（く）も不自由にもなきつまらぬ書物のみなり かゝる書類に眼をつからせ、肩をはらし、生命をむしり取られて一生を送るはあに心外ならずや イヤイヤさにあらず 是れは文章家の生涯なり 小説家は今少し打かかりたる所あるべし 一枝の筆を執りて（中略）学者も道德家も眼のとまかぬ所に於て真理を探り出し以て自ら安心を求めかねて衆人の世渡の助ともならばあに可ならずや されば小説は瑣事にあらず 之をいやしといふは非なり （落葉のはきよせ 二籠め）

この言説を彼の文学論と照らし合わせてみると、その「真理」という概念への凝視は、「あそび」を中心とした旧小説から「卑しく」ない新しい「小説」を目指す試みとも強く繋がっていることがわかる。すでに言及した二項対立の構造がこの文章にもうかがえるのであって、「文章家」／「小説家」、「益なくつまらない書物」／「瑣事でも卑しくもない世渡の助」がそれであるが、その後者を支える「真理」という用語は、それがたんに模写の対象というだけに止まらず、そこにはより広い文化的な

戦略が内在されていることがみとめられるのではなからうか。この問題は、節をかえて考察することにする。

三 小説の芸術化と芸術の実用化

―「小説神髓」から「小説総論」へと―

以上で考察した「小説総論」を初めとする二葉亭の文学論は、彼の理論形成における触媒の役割を担っていた逍遙の文学論にも少なからぬ影響を及ぼしている。そのことは、逍遙が二葉亭の「イデア論」および「真理論」の影響を受けているという事実からうかがうことができる。この「イデア論」および「真理論」は、「小説神髓」では見られない理論であるがゆえに、逍遙が二葉亭と知り合ってから、彼の理論的な感化を受けたという事実を示唆する典型的な例といえる。

①若夫小説家の本事といつば先人尚いまだ發揮し得ざりし新奇の妙想を写しだして真理の在る所を示すにあり彼の哲学者が脳髓を病まして刻苦焦慮して解剖せる真理を所謂包合して有の儘に活かして紙の上に描くにあり

②「科学と美術とは其目的を一にす。共に真理を知る方法ではあるが。一は知識を以てし。一は感覚を以てす」「神官は感覚の力をもて、妙に真理を発見するとは、魯の美学家の名言なり」

③「ところで、無形物を攻究する道は二つしかない。智力を以て穿鑿する、感情を以て穿鑿する、この二つである。智力を以て穿鑿するの学問とは、人間の智力を以て攻究する

ものをいふので、総称して哲学といふ。感情を以て攻究する者を称して之を美術と申すのである。美術は即ち哲学の力をもて攻究し得られぬを攻究するの学問であります」是よりアイデヤの事に付て今少しく委細述べようと思ひますが（中略）之を要するに、哲学は世の中の無形の真理を解剖して、殺して見せるものである。然るに美術は其真理を引きくるめて、生きたところをあらはすものである」¹⁶

このような逍遙の文学芸術をめぐるいくつかの言説を見ると、二葉亭の文学論の影響によつて、逍遙は自身の写実主義理論の骨子をなしていた「人情論」から「イデア論」へとその理論を変貌させている。逍遙の事実主義理論を表明している『小説神髓』においては、描写の一次的な対象は「人情」であつた。「人情」という言葉は、逍遙が「人間の情欲」とか「百八煩惱」とかで敷衍しているように、人間の普遍的な「心理」を指している用語である。ところが、その「人情」が右の言説では「真理」に到るための二次的な対象へと転移していることがわかる。その点で示唆的なのは、逍遙の日記に、二葉亭が「美術の目的は真理を發揮するにあり、神の製作には不美なるものなし」と述べたと書き込まれていることであり、この二葉亭の言葉なるものはまさに上記の逍遙の言説と一致している。実際、明治一九年以来逍遙と二葉亭は、文学芸術をめぐる多くの意見を交わしている。したがつて、右の引用文で芸術とは感覚をとおして「真理」に行き着き、その「真理」を呈示するという論理は、二葉亭の「小説総論」の文学芸術論を受け入れた結果だといえ

よう。

ところで、上掲の文学論を注意してみると、この「イデア論」あるいは「真理論」の外にも、これまでの先行論ではそれほど注目されてこなかった、今一つの二葉亭の影響を見出すことができる。それは、逍遙が「文学芸術」の概念を定位するにあつた、「学問」と「芸術」の関係、あるいは「学問」と「芸術」の対等性を意識しかけているということである。実際、後で詳しく考察するのだが、明治維新以来日本の「近代化」は自国の国力を何よりも早く欧米の先進国家の水準に到らせなければならぬとみなされたため、「実用中心」の「学問」における効用性だけが強調されすぎて、「文学」を意味する詩歌や小説は「無用」なものとして極端に卑しめられたり無視されたりしてきた。それにもかかわらず、『小説神髓』では、このような時代的思潮の中にあつても、「文学芸術」と「実用学問」の対等性に関わる課題は、その中心的な構想から排除されていた。だとすれば、「小説改良」を中心テーマとしていた「小説神髓」がなによりもまず成し遂げようとした課題はいかなることであつたのか。それは一応、次の言説をとおして理解することができる。

敢て持論を世に示して、まづ看官の惑を解き、兼ては作者の蒙を啓きて、我が小説の改良進歩を今より次第に企図つてつゝ、竟には欧土の小説を凌駕し、絵画、音楽、詩歌と共に美術の壇頭に煥然たる我が物語を見まくほりす。

畢竟、小説の旨とする所は専ら人情世態にあり（中略）

されば小説の完全無欠のものに於ては、画に画きがたきものを描写し、詩に尽しがたきものをも現はし、且つ演劇にて演じがたき隠微をも写しつべし（中略）是れ小説の美術中に其位置を得る所以にして、竟には伝奇、戯曲を凌駕し、文壇上の最大美術の其随一といはれつべき理由とならむも知るべからず。¹⁷⁾

この言説からわかるように、逍遙が『小説神髓』で意図したことは、江戸時代以来の戯作に代表される「小説文学」を改良し、小説を芸術の一分野として位置づけることであつた。それは、鈴木貞美が指摘するように、「坪内逍遙の頭の中を占めていたのは『政治小説』にしろ、戯作にしろ、小説を『改良』して、高尚な言語芸術を新しくつくりだすという課題だけだつた¹⁸⁾」といえよう。小説を美的価値から捉えるといった〈小説の芸術化〉、ここにこそ逍遙が立ち向かつていた一次的目的があつた。それゆえ、『小説神髓』の中には〈文学〉と〈学問〉の対等性といった問題への着目はそれほど意識的ではなかつた。「無用」なものとして見おろされている〈文学〉に〈実用的学問〉と同様の価値を見つけたところ、〈文学改良〉におけるもう一つの時代的使命があるという事実にめざめるのは、二葉亭の理論的刺戟を待たなければならなかつたのだ。¹⁹⁾

一方、逍遙の「勸善懲惡小説」の批判と写実主義といった問題意識を受け継ぎながらも、『小説神髓』より理論的にもっと深化されていると評価される二葉亭の「小説総論」には、実は当時の言論界を風靡する文学無用論への戦略がひそんでいた。

〈文学芸術〉に〈学問〉と対等な地位を賦与するという理論は、同時代の思潮への鋭敏な対応であつた。例えば、「小説総論」で物事の現象から「意」を穿鑿しようとする場合、「学問」と「美術」を並置して、「穿鑿といへど、仕方にも同様あり。一は智識を以て理會する学問上の穿鑿、一は感情を以て感得する美術上の穿鑿、是なり」と指摘している。この両者を並行させる言説によれば、「二二ンが四」ということは「学問的知識」を介して領けることであるが、唱歌のような芸術的産物とは学問的知識によつて理解しえず、「感情」によつてのみ始めて理解しうることだという論理で敷衍されることになる。この言説には明らかに、小説をふくめた芸術という媒体が人間にいかにも須不可欠なものであるのか、そしてそれがいかに「実用的学問」に劣らないものであるのかを認めさせようとする目的があると見えよう。このことは、「実用的学問」に対する「文学芸術」の価値領域を据え直そうとする戦略、すなわち当時の文化思潮への対決意識にほかならないだろう。言い換えれば、「実用的学問」の万能時代に無用なものとしてみなされがちな、小説を中心とする「芸術」の位置を、当時の文化思潮のコンテクストに即するかたちで、あらためて高めようとする戦略そのものであつた。

一般的に二葉亭の文学理論、とりわけその文学論の根幹をなしている模写論は、「形」(form)と「意」(idea)という概念によつて、「逍遙が不十分ながらも提唱した文学の虚性は、ここで（『小説総論』—引用者注）一段と深められその理論的根拠を持つにいたつた²⁰⁾」という側面で逍遙の写実論をより発展的に

引き継いだといわれている。しかし、二葉亭の文学論はこのような模写論の理論的土台を提示しただけでなく、明治の近代文学誕生期における〈文学芸術〉が当時の嫡子的存在であった〈実用的学問〉と同様の意味と機能を分かち合える媒体であるという価値観をも文学界に伝えようとする意図があったことを見逃してはならないだろう。そこに時代に鋭敏な戦略家としての二葉亭の言説の特色が認められるのであろう。

四 二葉亭の模写理論と〈文学無用論〉

—〈実の学〉への凝視—

二葉亭が小説文学や芸術のありかたを摸索する際に、「学問」との関わり方を意識していたという証拠は単に「小説総論」で見られることではない。二葉亭が自身の文学論を実作に試みたとされる『浮雲』の第三篇を執筆する頃に書き込んだ雑記帳『落葉のはきよせ二籠め』をみると、その考え方の延長線上にある言説に出会える。

是れ(前時代の小説に専念すること—引用者注)は文章家の生涯なり 小説家は(中略)学者も道德家も眼のとゞかぬ所に於て真理を探り出し以て自ら安心を求めかねて衆人の世渡の助ともならばあに可ならずや されば小説は瑣事にあらず 之をいやしといふは非なり

此東京を去り、何処にても静かなる所にて英語を教へ、その隙に自ら未だ読まざる書を涉獵して、智を研き心を練りてもて真理を看破せんと思ひ、またある時は此假小説な

とを妄りに作りて、(中略)かねては書を読み、世のさまをも観して真理の味ひも嘗めも(し)人にも嘗させんと思ふ。かう道を異にすれど到着く所は真理といふに他ならねば、いつれの道を蹈むとも我生涯の目的に於て分毫の損益なし

この引用文でも相変わらず、二葉亭は小説創作という行為を「真理」の探究にあると定位することによって、そこに学問における「真理」の探究と同様の位置を与えようとしている。特にこの言説で注目されるのは、その「真理」の探究という行為によって、小説が前時代の戯作と弁別されるのみならず、現実の人間一般に役に立つ〈有用〉なものとして位置づけられているという点である。

だとすれば、二葉亭が小説を含めた〈文学芸術〉の概念を新たに措定するに当たり、「学問」との関係をこれほど意識している理由はどこにあるのだろうか。それは、前にもふれたように、明治初期に欧米型の近代化に拍車をかけ、富国強兵といった時代的要請に照応した〈実用〉中心の文学(『学問』)史に対するアンチテーゼだといえる。明治期の代表的な啓蒙思想家、福沢諭吉は当時の啓蒙書の正典といえる『学問のすゝめ』で、

学問とは、ただむつかしき字を知り、解し難き古文を読むみ、和歌を榮しみ、詩を作るなど、世上に実のなき文学を言うにあらず。これらの文学も自ずから人の心を悦ばしめ随分調法なるものなれども、古来世間の儒者และ学者などの

申すよう、さまであがめ貰むべきものにあらず。古來漢學者に世帯持の上手なる者も少なく、和歌をよくして商売に巧者なる町人も稀なり。(中略)畢竟その學問(「詩歌」などの文學―引用者注)の実に遠くして日用の間に合わぬ証拠なり。されば今かかる実なき學問は先ず次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実學なり。²¹⁾

と断じている。この言説における福沢の態度を見るかぎり、文學とは現実の生活にまったく役に立たないものとみなしている。このような意味で、福沢は「文學無用論」を唱え、文學が世の中に少しも效用のない「実なき學問」という立場から、文學そのものを斥けようとしている。この態度は、「今世界中を見渡すに、文明開化とて文學も武備も盛んにして富強なる国あり、或いは蛮野未開とて文武ともに不行届にして貧弱なる国あり。一般に、ヨーロッパ、アメリカの諸国は富んで強く、アジア、アフリカの諸国は貧にして弱し」と地政学的な識見を披瀝し、それにもとづいて「しかのみならず貧富強弱の有様は、天然の約束に非ず、日との勉と不勉とに由つて移り変わるべきものにて、今日の愚人も明日は智者となるべく、昔年の富強も今世の貧弱となるべし」と述べる。それゆえに、「我日本国中も今より學問に志し、氣力を髓にして先ず一身の獨立を謀り、随つて一國の富強を致すことあらば、何ぞ西洋人の力を恐るるに足らん。道理あるものはこれに交わり、道理なきものはこれを打ち払わんのみ。一身獨立して一國獨立するとはこの事なり」と「実用的學問」を奨めるのである。この論旨によれば、「詩歌」

などの「文學」を斥け「実用的學問」を重んじる立場とは、狭くは個人、広くは國家の獨立と富國強兵を図るためであった。

實際、このような脈絡からみると、「実用的學問」の尊重とすることはその時代における風潮であった。この実用的學問の尊重はたんに福沢個人の主張にとどまらず、例えば、樽井藤吉という人が明治初期の立法機關であった左院に「実利実益ヲ増進セシメルガ為メ、妄誕不稽ノ稗史小説ヲ禁遏スベキコト」を建白したという事実をとおして、制度化への動きまで読み取れる。この建白の文章が証明しているように、明治初期の社会的雰囲気は「文學無用」を飛び越え、さらに「文學禁止」という認識さえあったといえよう。

このような時代的雰囲気はかなり長い間消え去らなかつた。この事實は『しがらみ草紙』の創刊号における森鷗外の「天下の人士は殆ど將に彼のプラトーが政策を學ばんとせり夫れプラトーは知るが故にあれを逐はんと欲し當時の人は知らずしてこれを逐はんと欲す、その源は同じからずと雖もその歸する所は實に一轍に出でんとせり」という文章によくうかがわれよう。

鷗外は、プラトーンが『國家論』で述べた、いわゆる「理想國家」では詩人を驅逐すべきだという言説をふまえ、明治初期の時代的雰囲気がいかに文學を無用視しているのかを攻撃する。ところが、この文章が書かれた明治二二年は、様々な分野・ジャンルにおける文學改良の動きが広がり、外山正一の『新體詩抄』、逍遙と二葉亭の写実主義小説論、末松謙澄の演劇改良への動きなどを始めとする多岐にわたる論議と成果が実っていた時期でもあつて、鷗外の言説は当時「文學無用論」がいかに根深く言

論界を風靡していたのかを実証している。

とりわけ、ここで注目されるのは、「文学無用」にたらなる「実学尊重」の認識が啓蒙思想家だけの時代認識ではなかったという事実である。明治一〇年代半ば頃、当時の青少年を主対象とした『小学雜誌』に、伊藤隆二郎という一少年がこの実学主義を強弁し詩歌のような「虚文空理」を斥けるべきだといった趣旨の、「時務ヲ知ルハ真ノ儒者ナルノ説」という短い投書がその事実よく物語っている。一方、この記事が発端となって明治一七年二月から六月にかけてこのテーマを論点とする様々な論争が行われたのだが、その中で伊藤の意見に同調する投書をいくつか紹介すると次のとおりである。

① 無用ノ学ハ学バズシテ可ナリ方今学問の道隆興シ世ノ学者動モスレバ無用の学ヲ事トスル者アリ豈ニ過チナラズヤ無用ノ学トハ何ゾヤ曰ク詩ヲ賦シ歌ヲ詠シ徒ニ虚文空理ヲ談ジテ其身及ビ国家ニ小補アラザル者是也

② 人文日ニ進ンデ大ニ開明ノ域ニ迫ル迪モ詩歌位オ以テ名ヲナス能ハズ実ニ其詩歌ヲ以テ名トナス時勢ハ以前徳川政府ノ如キ未開ナレバ是レ亦如何トモ計リ難キ所ナレモ此ノ明治時代ニ至リテハ（中略）実学ヲ講セザル者ナシ此ノ如キ時勢ナレバ何ゾ詩歌位ヲ以テ志ヲ遂グル能ハザル

③ 今日明治社会ニ生レ実利実学ヲ尊ブニ際シ詩歌果シテ何ノ効ガアル（中略）今日活動世界ニ於テ詩歌ヲ以テ社会人民ノ福祉ヲ為セシ者アリシカ又詩歌ヲ以テ諸物ヲ發明セシ者アリシカ我輩未ダ之ヲ見聞セザルナリ

④ 其实用ニ適スル学科トハ何ゾヤ経済、法律、工学、理学、農学等ナリ未ダ是レ等ノ学ヲ研究セザルニ先チ豈ニ詩歌ヲ賦詠スルコトヲ為シヤ（中略）（無用の学とは一引用者注）月ニ酔ヒテ詩ヲ賦シ花ニ戯レテ歌ヲ詠ズルガ如キ輕藻浮華ニ流レ虚文空理ヲ談ズル者ヲ謂フナリ諸君ト雖モ斯ノ如キモノヲバマサカ有用ノ学トハナサザル可シ²⁶

以上のごとき言説群をとおしてわかるように、「文学無用」の側に立つ投稿者の論調は、当時の時代的急務とはまさに実用的な「学問」に努めることであり、文学は「虚文」として現実社会にほとんど役に立たないというところに帰着する。まさに文学排斥論である。特にこの論争の投稿者は明治初期の文化思潮を指導する思想家ではなく、この種の雑誌の一般青少年読者であるからこそ、この言説は当時の「文学無用」という雰囲気がいかに社会の底辺にまで浸透していたのかを示唆する好資料といえる。

したがって、この実学尊重の時代的思潮の中で、東京外国語学校のロシア科で欧米の新文学にめざめた二葉亭が、文学の価値を認めるからこそ、この「文学無用」という時代的雰囲気を買拭することに努めなければならなかったのだ。そのため、彼の文学論は詩歌などで象徴される文学無用と実用的学問尊重という時代の構想をさかのぼり、「文学芸術」の価値を「実用学問」と同様の水準にまで高めるところに思想的戦略を据えたのであった。ここにこそ、明治一〇年代に立っていた「真理探究者」としての二葉亭の主体的な位置があった。

五 〈智〉の根源として「真理」の成立

— ロシア語の翻訳 —

以上からわかるように、二葉亭の文学論の根底には明治初期から綿々と流れていた〈美学尊重〉という時代思潮の中で「文学」というジャンルが無用視された時代的観念を真つ正面から乗り越えようとする意図があつた。その戦略的言説が、〈文学〉あるいは〈芸術〉の概念を定位する時、つねに〈学問〉と並立させている箇所である。

その並立はたんなる並立ではない。「学問を研くにしろ小説を書くにしろ——引用者注）かう道を異にすれど到着く所は真理といふに他ならぬ」といふ文章が示唆するように、この言説において〈文学芸術〉と〈学問〉を媒介する用語が真の模写対象としての「真理」という概念であつた。二葉亭は、「小説総論」で「真理」と概念系をひとしくする「意」や「イデア」を、〈文学芸術〉と〈学問〉の両分野でともに穿鑿すべき共通の究極的对象として位置づけている。例えば、文学芸術の目的も学問と同じく物事の本質の「意」（＝真理）を穿鑿するところにあるため、文学の価値は学問と同一だといふ論理がそれである。それは言い換えれば、〈文学芸術〉も〈学問〉もともにその究極的な探究の到達点がこの「真理」にあるがゆえ、同一の価値を孕んでいるといふことだ。

そこで問題となるのが、二葉亭の理論構築における「真理」という用語の成立過程である。実際、この「真理」という用語を二葉亭がどのように用いているかを見ると、いかに意識的で

あるかがわかる。二葉亭が最初に「真理」という言葉を使ったのは、前で言及したように「美術の本義」であつた。二葉亭は、物事の存在を「意」(idea) / 「形」(form) で二分類した際、その「意」に相当する「イデア」を「意匠の由て生ずる所のものは真理なり(中略) 自ら真理を生ずるとは真理の独生(その固有の時間を経過して発達すること)するを云ふ」というように、「真理」という言葉で翻訳している。

とすれば、二葉亭は「神の絶対的イデア」であるはずの言葉を「真理」と訳した理由はどこにあるのだろうか。右の文章の意識的な誤訳にこそ、二葉亭の「真理」という用語への強烈な執着を表わしているのではなからうか。というのは、「美術の本義」の別の個所で〈真理・真実〉を意味する「истина」というロシア語を正しく〈真理〉と訳しているからだ。このように、ロシア語の二つの異なる単語を、さらにはあらゆる存在の根源を意味する「神の絶対的イデア」という用語を〈真理〉という一つの単語で訳している意図は、「小説総論」で〈学問〉の「意」(＝「イデア」と〈芸術〉の「意」とを同じレベルに位置づけているところによく現れている。すなわち、「小説総論」の「意」に相当する「神の絶対的イデア」を「真理」と訳し、その「意」が〈学問・芸術〉の究極的な到達点と同一化し、そして「学問を研くにしろ小説を書くにしろ」到着く所は真理といふに他ならぬ」と結論づけるところにまさしく二葉亭独特の〈智〉の根源としての「真理」の成立をうかがうことができる。

実際、当時の〈啓蒙思想〉が初めて〈学問〉と名付けられた

言説を見ると、探究の究極的な対象、つまり「智」の根源を「真理」(truth) という概念で把握していた。例えば、

①学は知ることの積み重なりといふとも、惟だ徒らに多く知るを以て学問となすにはあらず、何事にもあれ、其源由よりして其真理(truth)を知るを学となすなり、(中略)簡条の目的に於ては真理の性質を持有すとは凡そ事物に於て夫れ夫れに惟一の動かすべからざる真理なるものあり之を捕まえて保持するを云ふなり(中略)故に学者専ら講究し、物に就て真理を極めざるべからず。それを講究して其真理を知るときは開物成務、厚生利用、又孔子の語に飽食暖衣逸居の処に至るも亦容易なりとす。

②理学者ハ惟宇宙間何ニテモ真理ヲ発見スルヲ目的トシ、其実地ニ効用有ルヤ否ヲ問ハズト雖、真理ヲ発見シ知識ヲ広ムルハ一トシテ早晚実地ノ利益ヲ生ゼザルコトナシ。

③学術は真理なり(中略)学術上の真理といへば、一定不変の物を指す(中略)教法上に至りては、その真理の分は人心世道を利益する最用最重のものなり。

④抑々学問ナルモノ、帰旨ヲ如何ト釋スルニ畢竟天地間事物ノ真理ヲ究明スルノ外ニ出テサルヘシト信ス果シテ然ラハ学問ナルモノハ決シテ時代ト場所トニ応シテ変スルモノニハ非サルヘシ。

という言説群がうかがわされているように、学問の目的はまさに「真理」(truth)にたどり着くことであり、さらにその「真理」

は現実の実質的な利益、すなわち人間の現実の営みにおける「実用的」で「効用的」な機能を持つ概念と認識されていた。二葉亭の前の文章も、このような認識の延長上において「智」の根源として「真理」を把握しているといえる。それゆえ、英語の「truth」に相当する「истина」を「真理」と訳すと同時に、すべての物事の現象の根源を意味する「神の絶対的アイデア」も「真理」と訳し、それを「学問」と「文学芸術」が窮極的に到るべき共通の分母として把握しているのだ。「神の絶対的アイデア」が、当時幅広く認められていた学問上の「真理」へと転化させ、その一方で文学芸術における美の実在である「アイデア」を実用学問上の智の根源である「真理」へと変容させる、そこにこそ二葉亭の文学認識の出発点が示唆されている。

二葉亭にとって文学における模写の対象である「真理」という概念が、このように「智」の根源を意味する「学問」上の「真理」と同一に考えられたという根拠はこれだけではない。

二葉亭にとって「真理」という概念は、小説で模写すべき真の対象を意味するとともに、もう一方では、「是れ(前時代の小説に専念すること―引用者注)は文章家の生涯なり 小説家は(中略)学者も道德家も眼のとゞかぬ所に於て真理を探り出し以て自ら安心を求めかねて衆人の世渡の助ともならばあに可ならずや されば小説は瑣事にあらず 之をいやしといふは非なり」という言説が示すように、現実の人間に「実用的」なもの、価値あるものとしても位置づけられていた。そのような認識にもとづいて「真理」探究を目指す新小説を前時代の小説と区別していた。文学とは「無用」なものとして考えられる傾向が強

かつた時代に、二葉亭は「真理」という概念を媒介にして文学を「実用的」なものとして捉え返そうとした。その根拠は「実用学問」の「真理」の「実用性」に基礎づけられていた。このような概念の同一化を背景とする二葉亭の「真理論」は、当時の一定不変な性質を持つ「実用学問」上の「真理」という概念の借用があったといえる。それは「文学」の「真理」にも「実用学問」の「真理」に相当する市民権を与えようとする試みであった。ここにまさしく二葉亭の文学論の時代の文化思潮とかわる文学史の意味が孕まれていたといえよう。

二葉亭の「真理」という概念は当時の啓蒙思想あるいは近代科学思想の洗礼を受けている以上、その「真理」がつねに一定不変の絶対的なものと認識されるという事実は必然の結果だともいえる。このような背景において、「運動・変化・発展」の属性を持つベリンスキーの「イデア」が「万古不変の必然的なもの」として、ただ「宇宙間の森羅万象の中にある」絶対的一定不変のものへと概念を転移させることとなったといえよう。

こうして、二葉亭は文学における模写の真の対象である「真理」を当時の実用的学問における「智」の根源であった「一定不変の真理」と同一化することによって、「文学芸術」そのものも決して社会的に「卑しく」役に立たないものでない、「有用」な対象として高揚させようとした。まさしくここにこそ、明治一〇年代という「文学環境」の中で文学への道に踏み出した二葉亭が乗り越えなければならなかった一つの険峻な山があったのだ。

六 むすび

「小説総論」を発表して以来、二葉亭は以上の模写理論で目配りしていた「学問」と「芸術」の関係性といった問題を、一連のロシアの文学（芸術）評論の翻訳というかたちで呈示している。

美術は猶学問の如く、先ず物の皮を剥て、中に籠れる真理を取出し、而して後に真理に任せて自在に人の所説所願の上に働かしむものなり（「カートコフ氏美術俗解」）
凡そ學術は物を変じて意思となし、美術は意思を変じて物となす。學術は實在の物を変じて虚靈の物となし、美術は虚靈の物を変じて實在の物となす。（中略）學術に在りては種々の物象智識に集まり、美術に在りては智識種々の物象に変ず。（「學術と美術の差別」）

この引用言説がうかがわせるように、この文学論で中心的に論じられている内容は、これまで考察してきた問題意識、つまり「文学芸術」にして「学問」と対等な位置を与えようとする意図の延長といえる、さらに、この文学評論の翻訳が明治二二年に訳された「文学の本色及び平民と文学の関係」という評論の端書きに弁じた「私の之を訳したのは、此訳文に依りて、露国の批評家の識力を世に吹聴せんが為めではなく、若し此中に我邦の時弊に適切な議論がありはすまいかと思つたからです」という問題意識と共鳴しているといえ、二葉亭は文学論の翻訳をとおして「文学無用」というこの時代の「時弊」を払拭し

ようとする熾烈な意図に依然として燃え続けられていたのだ。

したがって、「小説総論」を中心とした模写小説論やロシア文学論の翻訳に秘められている二葉亭の胸中には、〈文学芸術〉、とりわけ〈小説〉の社会的位置の高揚といった意図が貫いていたといえる。この役割こそ、欧米の実用的・科学的学問の積極的な受容を意味する、いわゆる啓蒙思想の繰り広がる真ん中で学校教育を受けた二葉亭が不毛の地、文学理論の領域で担っていた〈文学環境〉であった。ところで、この課題に取り組みに際して、その答えとして導かれた道筋となったのがまさしく、模写の対象としての「真理」という概念の成立であり、〈智〉の根源としての「真理」の成立に他ならなかった。

注

本論に引用した二葉亭四迷のテキストは、「二葉亭四迷全集」(筑摩書房)による。二葉亭四迷のテキストからの引用は、出典のみを付すことにする。なお、引用文の中で、旧字体の漢字は新字体に改めた。

- (1) 畑有三「二葉亭四迷——「真理」探究と文学者の成立——」(日本文学協会編「日本文学」、一九六五年十一月) 一—九頁参考。
- (2) 岩城準太郎「自然主義以前の作家(上)——二葉亭四迷——」(岩波講座「日本文学」、岩波書店、一九三三年四月) 八頁。
- (3) 坪内逍遙「ヤヨ喃暫らく、白雪山人に物申さん」(『読売新聞』、一八八七年一月二日)。
- (4) 石田忠彦「坪内逍遙研究」(九州大学出版会、一九八八年) 二三—三頁。
- (5) 坪内逍遙「二葉亭のこと」、『柿の帯』
- (6) 黒沢峯夫訳「芸術の理念」(『比較文学年誌』、東京・早稲田大学比較文学研究会、一九七〇年三月) 一一—五頁。
- (7) 十川信介「実相」と「虚相」——「小説総論」について——(増補二葉亭四迷論、筑摩書房、一九八四年) 一五—二頁。

- (8) 十川、前掲論文、一六七頁。
- (9) 北岡誠司「『小説総論』材源考——二葉亭とペリンスキー——」(日本文学研究資料刊行会編「坪内逍遙二葉亭四迷」、有精堂、一九八四年) 一六—六頁。
- (10) 黒沢、前掲論文、一三七参考。
- (11) 北岡、前掲論文、一六六頁。
- (12) 十川、前掲論文。
- (13) 中村正直「漢学不可廢論」(『明治文学全集3 明治啓蒙思想集』、一九六七年) 三一—八—三—一九頁(初出年は一八八七年五月)。
- (14) 西周「百学連環」(『日本近代思想大系14 科学と技術』、岩波書店、一九八九年) 六七—六九頁(初出年は一八七〇年)。
- (15) 伊岐定子「宗教真偽論」(『女学雑誌』第四四号、女学雑誌社、一八八六年二月) 七—四頁。
- (16) ①坪内逍遙「柳亭種彦の評判」(『中央学術雑誌』第三四号、一八八六年一〇月) 四四—四五頁。
②坪内逍遙「内地雑居未来の夢」(『逍遙選集』、第一書房、一九七七年) 五三—三頁と六七—四—六七—五頁。
- (17) 坪内逍遙「小説神髓」(『明治文学全集5 坪内逍遙集』、筑摩書房、一九六九年) 四頁と七頁。
- (18) 鈴木貞美「日本の「文学」概念」(作品社、一九九八年) 二〇—九頁。
- (19) 坪内逍遙が「小説改良」を掲げた際、彼もこの〈実学尊重〉／〈詩歌・小説無用論〉といった時代の思潮を充分意識していた。それは、明治一八年五月一日の日付の『読売新聞』で、浅野狂夫という人が「想の日新する今日に在てハ詩学の困難益々増加して逆も其希望を達する事能はざるべし左レバ詩歌に熱心なる志望を他の学芸に移し日進文明の流に沿ふて有益の事業に従事すること今日之急務なり」(『詩歌ハ文明と並進せず』)と主張したことに反発して、三日後の同新聞で「詩歌にも改良の方法あり美術にも進化の次第あるを毫も覺ら

れざるもの、如し」(美術ハ国家の花ともいふべく実学ハ其葉其枝なり)「実利にのみ偏る」(詩歌の改良)ことに問題提起しながら「美術の改良」を促しているところからうかがえる。しかし、その考えが理論的に構築されるのは二葉亭の「真理論」の影響を受けてからだと見える。

(20) 十川信介「逍遙から二葉亭へ」(前掲書) 三〇三頁。

(21) 福沢諭吉「学問のすゝめ」(『日本現代文学全集2』、講談社、一九六九年) 八頁。

(22) 上の書、一四頁。

(23) 柳田泉「明治初期の文学思想 上巻」(春秋社、一九六五年) 六五頁参考。

(24) 森岡外「しがらみ草紙」の本領を論ず」(しがらみ草紙) 第一号、新声社、一八八九年一〇月 一頁。

(25) ①伊藤隆二郎「時務ヲ知ルハ真ノ儒者ナルノ説」(『小学雑誌』第七四、修正社、一八八四年二月) 四二頁。

②小川剛「誑佐々木賜君駁伊藤隆次郎君論」(第八四号、一八八四年四月) 二〇四頁。

③曾我三郎「詩歌ヲ弁ジテ諸子ニ告グ」(第八六号、一八八四年五月) 一三四〜一三五 頁。

④山村泰蔵「詩歌ノ学今世ニ急ナラズ」(第八九号、一八八四年五月) 二八四頁。

(26) 西周「百学連環」、五五〜七〇頁。

(27) 菊池大麓「理学之説」(『日本近代思想大系』科学と技術) 二二六頁。

(28) 中村正直「漢学不可廢論」、三二八〜三二九頁。

(29) 加藤弘之「何ヲカ学問ト云フ」(『学芸雜誌』第一六卷、一八八五年四月) 四八八頁。

(チヨン) ビョンホ 筑波大学大学院博士課程 文芸・言語研究科 文学